

アイデンティティの喪失を憂う。

織田 邦男 ● 元谷 外志雄

(航空自衛隊第六航空団司令兼
小松基地司令/空海補)

(APAグループ代表)



グローバルな時代だからこそ、日本人としてのアイデンティティが問われる。



死生観、あるいは人生観、それを持つていないと務まらない。

元谷 ● 今日は大変お忙しいところをビッグトークにご登場いただき、ありがとうございます。この対談でも歴代の基地司令にご登場頂いておりますので、織田司令にもいろいろなお話を教えたかったなと思っております。

織田 ● こちらこそ光栄です。私は白いマフラーを放さない



織田 ● そうですね。同期で言えば五百三十名ばかり入学しましたが、在学中に留年したり、自らやめたりして卒業したのは四百八十名。そのうちの約六十名がパイロットを希望しましたが、実際になつたのは十八名だけです。

元谷 ● 五百三十名のうちの十八名。すごい確率ですね。織田 ● 空へのあこがれ、これは誰もが持つていられるので、すけれども、それだけでは駄目なんです。当然ながら訓練がきついで、すが、そのときにいわゆる精神的な基盤として何を

持っているかと思うのです。死生観、あるいは自分の人生観、あるいは国防に対する理解。そういうのがないと最後にはやはり淘汰されていきます。

元谷 ● 安易な道を選択したくなるのが人間ですから。強い使命感がなければ、挫折が待っているだけということですね。その強い意志を継続させた司令は、アメリカへの留学を二回もされていますよね。

織田 ● アラバマ州のマックスウ

エル空軍基地というところに空軍大学がありまして、空軍将校の教育のメッカなんです。そこで約一年間の留学が最初です。そのあとはカリフォルニアのスタンフォード大学での客員研究員です。これは軍とは全然関係のない研究室で、安全保障を勉強させてもらいました。まさに国益です。国益がいかにあるべきかを定義して、今の国際関係をどういうふうに我々に有利にしようかというのがアメリカのポリシーですから。

元谷 ● それが日本では、国益の主張をすることだけで、もうすでにそれが何かいかにも右よりだとか右翼だとか言われてね。織田 ● だから私はそれがなぜかなどいつも考えるのですが。究極的なところはアイデンティティの喪失だと思います。

この間、石原慎太郎が確か産経新聞に書いていたんですけれども、沖縄のドロップアウトした子どもばかりを集める学校があつて、それを映像で見たと。先生が「お前たち何をやりたいんだ。将来何をやりたいか書きなさい」と言つたときに書きなくて、あげくのはてにぼろぼろ涙を流したと。自分のアイデンティティをそこまで喪失

しているわけです。また、島田晴雄という慶応大学の教授が同様のことを書いています。ものすごく優秀な偏差値の高い学生が、就職活動に入ったとたん思考停止に陥るといって。どちらも同じことだと思うのですが、ドロップアウトした子と偏差値の高い学生と。自分のアイデンティティを喪失しているのだと思います。個人の生き方と社会のあり方、国家のあり方、要は公のあり方ですが、その関係が切れてしまっているんです。だから、自分が社会でどう生きていくかがわからない。

元谷 ● そういう教育システムに

問題もありますね。学校でも家庭でもそれから社会でも、その辺を一番教えていなくて、それでいきなり甘やかされ育った人が社会に出てくるわけですから……。

オーストリッチファッション！見ないで済ませられる時代ではない。

織田 ● 日本のことを言うのに、オーストリッチファッションという言葉があるのですが……。オーストリッチというのはダチョウですよ。自分の都合の悪いこと、あるいは自分に降りかかる危険が迫ると、ダチョウというのは穴に首を突っ込んでしま

のですが……。それは、パイロットへの憧れの原点であつた、叔父のパイロット姿が、潜在意識として、無形の教育として、私の中に培われたのだと思うのです。

叔父は、ゼロ戦に乗っていたのですが、最後は戦死しました……。元谷 ● なるほど、それが織田司令の原点なのですか……。司令は、防衛大学を出られてパイロットの道を目指されたのですよね。とても狭い門だとお聞き

していますか……。織田 ● アラバマ州のマックスウ

エル空軍基地というところに空軍大学がありまして、空軍将校の教育のメッカなんです。そこで約一年間の留学が最初です。そのあとはカリフォルニアのスタンフォード大学での客員研究員です。これは軍とは全然関係のない研究室で、安全保障を勉強させてもらいました。まさに国益です。国益がいかにあるべきかを定義して、今の国際関係をどういうふうに我々に有利にしようかというのがアメリカのポリシーですから。

元谷 ● それが日本では、国益の主張をすることだけで、もうすでにそれが何かいかにも右よりだとか右翼だとか言われてね。織田 ● だから私はそれがなぜかなどいつも考えるのですが。究極的なところはアイデンティティの喪失だと思います。



のです。見ないようにするわけです(笑)。でもいまの日本が冷戦世界環境というのを恐ろしいから見ないというのでは困るわけです。実際に目を見開いて、開示して、それに対してどうするかというのを真剣に議論しなければいけない……。

織田 ● オーストリッチファッションというのは冷戦時代には、それでもなんとか済んできたわけですが、保護されていて、死んだ振りして済ませてきたのがこれまでの日本です。でも、これからは環境が許さないと、元谷 ● 日本が貧しい国ならいいのですが、これだけ豊かになって富を持った国なのですから……。

織田 ● 江沢民がある国へ行つたときのこと、日本のことが議論になったら「あれはいんだ、二十年経てば滅びるから」と言ったそうです。私は冗談ではなくて、安全保障を担当する者として、危機感を持つて人です。それは何かという人です、人のものの考え方です。

織田 ● それは日本とアメリカの違いでしょうね。アメリカはアメリカ人というアイデンティティをなくした短い歴史しかありませんから……。



元谷 ● 熊に会って死んだ振りをしてると食われるらしい……(笑)。熊に対しては、やはり毅然と立ち向かうと熊のほうがあつたらだと言います。昔は熊にあつたら死んだ振りをしろと言っていたんだけど、間違いらしいですね。

元谷 ● 今から変わっていかねればいけませんよ。織田 ● そうですよ。元谷 ● 先、日本が生き抜くために、信長の発想が求められている。元谷 ● いま大変な時代なのに、日本の政治家は兵器音痴と言いますが、兵器のことを言ったり、軍事のことを言っただけで目くじらを立ててしまいますから……。

織田 ● そうですよ。今は信長の発想が必要としていないのではないですか。東西冷戦中とはちがく、この先日本が生き抜いて二十一世紀も経済大国としてやっていけるかどうかというのはその辺にかかっていますよ。元谷 ● アメリカにとって当然なことなら、日本もまた当然の域に達しないといけないのではないかと……。



元谷 ● 熊に会って死んだ振りをしてると食われるらしい……(笑)。熊に対しては、やはり毅然と立ち向かうと熊のほうがあつたらだと言います。昔は熊にあつたら死んだ振りをしろと言っていたんだけど、間違いらしいですね。

元谷 ● 熊に会って死んだ振りをしてると食われるらしい……(笑)。熊に対しては、やはり毅然と立ち向かうと熊のほうがあつたらだと言います。昔は熊にあつたら死んだ振りをしろと言っていたんだけど、間違いらしいですね。

元谷 ● 熊に会って死んだ振りをしてると食われるらしい……(笑)。熊に対しては、やはり毅然と立ち向かうと熊のほうがあつたらだと言います。昔は熊にあつたら死んだ振りをしろと言っていたんだけど、間違いらしいですね。



現実の中を、日本の政治家とかが、その辺の理解をして国益をきちっと主張できる、またそれをサポートできるマスコミであり、国民でなければいけないと私は思っています。

元谷 ● 政治家だけで突出しても、すぐにマスコミにたたかれて失脚でしょう。だからやはりこの国民にして、このマスコミありと……。

元谷 ● 政治家だけで突出しても、すぐにマスコミにたたかれて失脚でしょう。だからやはりこの国民にして、このマスコミありと……。

元谷 ● 政治家だけで突出しても、すぐにマスコミにたたかれて失脚でしょう。だからやはりこの国民にして、このマスコミありと……。

織田司令のホームページがあります。是非ご覧下さい!
<http://www.asahi-net.or.jp/~xk7k-ort/>
代表が会長を務める小松基地金沢友の会のホームページを開設!
<http://www.jasdfmate.gr.jp>